

2007. 1. 1
月刊通信
はなしがい
第246号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX. 03-3445-6499
郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円千共）

今から一〇〇年ほど前、日本の社会をどのように変えるか、さまざまな考えから社会運動が起こりました。明治維新で成立した国家に対する社会変革の運動です。しかし、明治四三(1910)年の「大逆事件」をきっかけに運動は沈滞します。そんな時代に雑誌『近代思想』や『平民新聞』などを刊行して、活発に運動を繰り広げたのが大杉榮でした。

大杉榮はアナキズムの思想家と呼ばれます。アナキズムとは無政府主義のことですが、社会主義者、共産主義者以上の過激な思想だといわれます。わたし自身かつて大杉榮について、凶暴な過激派とでもいうような印象を抱いていました。しかし、『自叙伝・日本脱出記』（岩波文庫）を読んでから考えが変わりました。夏目漱石の「坊ちゃん」と重なるような人間的な魅力にあふれる人物なのです。

無政府主義とかアナキズムということばには、その後の歴史を通じてマイナスイメージが付与されてきました。しかし、そこには、一人ひとりの人間が、国家やその他の組織とどのように関わって生きるのかという重要な問いかけがあります。

ビートルズのジョン・レノンが作詞した『イメージ』も、中国の詩人・陶淵明が描いた「桃源郷」も、国や政府のない社会の理想像でした。古くギリシア時代の哲学にも、アナキズムの原点となる思想があります。国や社会や組織に縛られない自由な生き方というのは人間の生きかたの永遠の理想なのです。

●大杉榮の教育論

『大杉榮語録』（2001岩波現代文庫、鎌田慧・編）に「本当の教育とは」という節があります。わずか四ページの部分ですが、未来の社会を作るべき人間の教育はどうあるべきかという大杉の基本的な考えが読みとれます。

まず、学校教育についての不満があります。

「何学問でもそうだが、その最初からの研究方法を教えずに、ちゃんとできあがった学説を真最初から覚えこませるのが、今日の学校教育である。」

学校教育では、知識を教えることより知識の獲得の仕方こそ大事であるというのです。

そして、学校で使う書物への不満も述べられます。

「すべてきわめて解りやすく書かれてある。読んでさえ行けば、大して考えずとも、また大した疑いも挟まずに、ひとりでに合点の行くように書かれてある。」

今日でも、教科書を「分かりやすく」する傾向は変わりません。これには、国家にとって「二重の利益」があると云います。その一つは、「将来国家のために有用な人物となるべき生徒に、短い時間にいるいろなことを覚えこませること」、もう一つは、「国家のためには常に有害な個人的思索の能力を、早くから減殺^{げんさい}させてしまうこと」です。

大杉は、教育において何よりも「個人的思索」を重視します。しかし、それこそ、国家にとって「常に有害」だとされるのです。ここに無政府主義の根本である自由尊重と個人尊重の精神があります。

「この個人的思索の能力を発達させるということが、実を言えば、教育の本当の目的でなければならぬのだ。またいっさいの学問の研究方法というのも、そこにもとづかなければならぬのだ。」

これが、「自由人」を理想とする大杉の教育論の

根本です。そして、自由な教育に対立する相手の存も見すえています。

「けれども各個人のこの能力の発達には、今日の組織の国家や社会にとっては、その存亡に関するゆゆしき一大事である。ことに、政治学とか、法律学とか、経済学とか、史学とかの社会科学においては、国家の教える範囲以外に、決して個人的思索を許さない。」

それで、本当の研究の目指すべきは次のことです。「政府的思想によるいっさいの学者と書籍とを斥けて、自らの眼をもって社会的事物を観察し、自分の頭をもってそれを判断しうる力を造ることになければならぬ。」

●実践・行動・学問

そうして、実際に日々の生活で、何について、どのように考えて生きるのかという方法も語られます。いわば自己教育にもとづく人生論とも言えます。

「僕らは僕らの日々の生活において、必ず何事かを考え、またその考えをあくまでも進ませて行かなければならぬ、ある要求に当面する。」「僕らは、僕

ら自身のこの内的要求を、何よりもまず他人の著書によって、すなわち他人の観察と、他人の判断とによって、満足さすというような怠け者であってはいけない。よしすでに受け入れているある判断があったところで、さらに自らの観察と実験とによって、再び判断し正さなければいけない。本当に自ら刻苦して、骨身にまでも徹する、僕ら自身の判断を造り上げて行かなければいけない。」

大杉は日常の「事実」を自らの考えの根本に置くことをすすめます。

「書物を読むよりも先ず、自らの身の周辺の生きている事実を目を転ぜよ。そしてその事実に対して、いたずらに頭の中で理屈をこね廻さずに、ただだそのありのままを注視せよ。その事実そのものに対してはあくまでも深く、またその事実と関連する諸事実に対してはあくまでも広く、できるだけだけの観察と調査とを遂げよ。」

そして、実践と行動について述べています。

「また必要な場合には、(中略)自らその事実の中に身を投じて見よ。すなわち自ら自らを実験に供

してみよ。かくのごとき観察と実験との度重なるに従って、初めて僕らは、僕ら自身の、動かすべからざる思想を築きあげてゆくのだ。」

わたしは、近ごろ日本では、さまざまな分野において人びとを組織化しようとする傾向が気になります。その一方で、組織されない人びとに対する暴力も目立ちます。学校でのイジメや、それを原因とする自殺、ホームレスの人たちへの暴力事件などはそのひとつの例です。

それは国や社会によって組織化された権力が背景にあるからこそ行われることではないでしょうか。現に、大杉榮は大正一二(1923)年九月十六日、関東大震災の後のゴタゴタの中で、妻・伊藤野枝、五歳の甥・橘宗一とともに軍隊によって虐殺されました。

アナキズムは組織化されて固定化される社会に対する根本的な反対思想です。自由な人間の思想の原点といえます。国や社会がさまざまなかたちで組織され、個々人の自由な行動が制限されつつあるときに、あらためてアナキズムの思想の意味が問いなおされるべきだと思えます。

2007. 2. 1

月刊通信

はなしがい

第247号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円千共）

テレビの教育番組で、小学校の英語の先生がやたらにハシヤいである授業を見ました。本人はぺらぺらとしきりに英語で語りかけるのですが、肝心の子どもたちは、わたしの見るかぎり、半分以上がシラけているのです。先生の口から新しい単語が出るたびに混乱しているようにも見えました。

このような授業が、小学校での英語教育の典型なのでしょう。先生のコトバが子どもたちに届いていないのではないかと不安になりました。小学校からの英語教育については反対意見もあります。その一方で、国語教育の重要性が唱えられています。そもそもコトバの教育の根本が見失われているような気がします。

●人間とコトバの能力

コトバの能力とは人間にとって根本的に重要なものです。人間はコトバによってものごとを考えたたり、他の人とのコミュニケーションをします。日本人にとってのコトバは日本語です。

竹内敏晴『声が生まれる』（2007中公新書）は、

本来のコトバの重要さを教えてくれる本です。竹内さんは幼い頃から耳が悪くて、中学生のときには、耳鳴りがして、ほとんど聞こえなくなりました。そのために、発声に障害が出るようになります。しかし、その後、大学を出て演劇の仕事に進みます。そして、裏方の仕事をしながら発声の方法を探求して、独自の発声方法を築きあげました。

この本には、コトバの基本についていろいろと書かれています。例えば、メルローポンティという学者の「第一次言語」と「第二次言語」です。一般にコトバのはたらきはコミュニケーションだといわれます。それは「第二次言語」のことです。コトバには人と人との間で共通の意味をもちます。それによって情報伝達ができます。

それに対して、「第一次言語」と言うのは、「現れつつ意味を形成することば」です。竹内さんは「母を呼ぶ幼な子のことば」を例にあげて、「恋するものがはじめて気持ちを打ち明けるような、あるいは詩人や哲学者などの、根源的体験を言い表すことば」と説明します。

つまり、コトバはすでに意味の固まった器のようなものではなく、ひとりの人の口から出るときに、新しい意味を生み出す働きをもつのです。これを竹内さんは自らの声を生み出す体験からつかみました。ヒントになったのは、メルロ＝ポンティの考えでした。人間は外部の因果関係の結果ではなく、「私」の経験から出発して世界を知るものなのです。コトバについても同じことです。声にしてコトバを発するときは、私たち人間ひとりひとりが自らの発見や意味を生み出しているのです。オウムのように機械的に暗記して声を出すわけではないのです。

●「第一次言語」と「第二次言語」の統一

そこで、竹内さんが開発したコトバの訓練は、声と意味とを結びつけた音声表現です。「第一次言語」と「第二次言語」を統一するものです。

一般にコトバというと、多くの人が文字に書かれたコトバを思い浮かべます。それほど現代社会では文字言語の「情報」にあふれているわけです。しかし、文字のコトバが人と人とのコミュニケーション

にどれほど役立つているでしょうか。竹内さんは音声言語の表現を重視します。じつは文字のことばよりも、音声のコトバの方が豊かな意味を持っているのです。

わたしはその考えにひかれました。わたしの実践している表現よみに通じるものがあります。表現よみとは、文字言語で書かれた文学作品を声に表現して読むものです。読む文章は他人の書いた作品なのですが、作品を受け止める人、つまり読み手は内容を理解し、新たな意味を付け加えて声に表現します。

「第二次言語」である文学作品が「第一次言語」としてよみがえるわけです。

●「呼びかけのレッスン」

竹内さんのレッスンの基本は、次のようなものです。呼びかける人がひとり前で前に立ちます。そして、複数の呼びかけられる人たちが一程の距離を置いて、背を向けてばらばらに座ります。

つまり、呼びかける人は、複数の人たちの背中に向かって声をかけるわけです。これと定めた人に向

かって、何かを話しかけます。「今日は風が強いな」とか、そして、自分に向かって呼びかけられたと感じた人は、手を挙げて反応します。あるいは、聞き方の訓練としては、呼びかけた人たちの声についての印象を受け手に語らせませす。情報としてコトバの意味を聞くのではなく、声の届き方を聞く訓練です。それが「第二次言語」ではなく、「第一次言語」への集中力を高めるのです。

声の届き方にはいろいろなものがあります。①頭の上を飛び越してゆく声、②手前で落ちてしまう声、③途中で引き返す声、④カーブして脇にそれる声、⑤グリーンとなぐりつけるような声、⑥両脇に分かれて通過する声、⑦触れられて暖かくなる声、⑧全体を包み込むような声——これらの声のイメージがイラスト付きで本には紹介されています。

さらに、この本には、竹内さんがたどってきた日本語の発声方法も紹介されています。わたしが関心を持ったのは「謡」の発声でした。文字化されたものは次のようです。

それ 青陽の 春になれば……

しかし、これをただ読みあげてもかつての声とはなりません。実際の声は次のような表記であらわされます。

スオルエ スエイイヨウヌオ ハアルウニヌアルエエブアア……

文字言語と音声言語には差があります。文字言語の普及は、人間の生活を便利にしました。考えが保存できるようになり、手紙などで考えを遠くへ運ぶことができるようになりました。考えが時間と空間を越えて、しかも多くの情報を伝達することができるようになりました。

しかし、そのために、本来、声であったコトバが人と人との距離を遠くしています。もう一度、声のコトバによる人と人とのかわりについて、あらゆる人間関係を問い直す必要があります。とくに、教育の場における声のコトバは重要です。先生のコトバは生徒たちに届いているのでしょうか。親のコトバは子どもたちに届いているのでしょうか。人と人とが直接向き合って語り合える声のコトバの教育こそ根本にすえられるべきです。

2007. 3. 1
月刊通信
はなしがい
第248号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX. 03-3445-6499
郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円千共）

内田樹『下流志向』（2007講談社）が売れていま
す。内田さんの本はこれまで何冊か紹介しましたが、
いつもながら刺激的です。教育について、子どもに
ついて根本から考えさせてくれます。サブタイトル
は「学ばない子どもたち、働かない子どもたち」、
教育学者の佐藤学さんのことば「学びからの逃走」
を手がかりに子どもたちの現状を探索したものです。
「学びからの逃走」とは、エーリッヒ・フロムの
『自由からの逃走』という本のタイトルに重ねたこ
とばです。「教育を受ける権利」をあつさり放棄
している現代の子どもたちの態度のことです。それ
を「下流志向」と呼ぶのです。

わたしが知人に「下流志向」の話をする時、「ファッ
ションについてもずいぶん前からその傾向がありま
すね。わざわざ古着を着たり、ジーンズに傷をつけ
たり、穴をあけたりしています。上昇をあきらめた
とはいっても、それだけ生活に恵まれているから下
降できるわけですね」と言われました。

なるほどと思いました。しかし、今では、かつて
の恵まれた生活とはちがう厳しい現実に、若者ばか

りでなくわたしたちも直面しています。

●「消費者」としての生徒

わたしが感心したのは、「学びからの逃走」を商
品経済社会で育つ人間の性格として説明したところ
です。子どもたちが変わったのは一九八〇年ごろか
らです。わたしは以前から、一九七三年のオイルショッ
クが「消費社会」へ転換するきっかけだと考えてい
ます。それから一〇年ほどで、文化的にも「消費社
会」は成熟に近づいたということになります。

資本主義社会はモノの生産の発展を目ざす経済制
度です。しかし、生産の発展は永遠につづくわけ
ありません。ある時点で基本的なモノは満たされま
す。人びとの間に一通りモノが普及します。そうな
れば、消費の増大によって生産を刺激することが課
題になります。それで「消費」が礼讃され、消費者
が持ち上げられるようになるわけです。現代の日本
で有数な好景気の事業「サラ金」に代表されるクレ
ジットも消費社会を象徴するものです。

そんな時代に生まれ育った子どもたちの消費者へ

のデビューと目覚めを、内田さんは「驚嘆をすべき経験」として描きます。お金を持っていけば、たとえ四歳であろうと「交渉相手として対等に遇してくれる」という経験です。「その人の年齢や識見や社会的能力などの個人的要素は基本的に誰もカウントしない」のです。「僕は買い手である」と名乗りさえすれば、どんな子どもでもマーケットに一人前のプレイヤーとして参入することが許される、その経験のもたらすしびれるような快感」です。

●学校という「市場」

商品の「買い手」として目覚めて育った子どもたちは、教育の場にもどのように臨むのでしょうか。内田さんは、諏訪哲二『オレ様化する子どもたち』（2005中公新書）を参考にして、教育現場のようすを語ります。「先生、これは何の役に立つんですか？」という典型的な質問に「買い手」の立場を見ます。生徒は授業によって自分に得られるべき利益を問うのです。この場を市場の原理で言うなら、教室は「市場」、生徒は「買い手」、教師は「売り手」、

教育は「商品」ということになります。

それでは、市場の貨幣にあたるモノは何でしょうか。親や保護者にとってはお金でしょうか。しかし、子どもにとってはそうではありません。内田さんは「不快」の気持ちだといいます。つまり、生徒が教室で味わう「忍耐」が、教育の「売り手」である教師に払うべき代価なのです。わたしも自分の経験から納得がいきます。学生たちは一見おとなしいのですが、そこには無関心のような静けさがあります。生徒は「不快」をちらつかせることで教師から多くの利益を引き出せると考えるわけです。

もちろん、これは仮説です。しかし、この原理でかなりの部分が説明できます。現代の子どもたちは「消費者」として育てられました。「お客様」としてご機嫌を取られてきました。不機嫌を示せば示すほどもたらされる利益は上ってきたのです。それが「オレ様化」の文化的な背景なのです。

●「教育」は商品ではない

しかし、内田さんは、教育の原理と市場の原理とを恐れるのです。その典型として内田さんは本の「読み飛ばし」をあげています。学生が雑誌などを読むとき、文中に読めない漢字や分からない語句があっても読み飛ばして平気だと言います。普通なら気になって調べたりしますが、そんなことはありません。若い人たちがモノを知らないことを恥と思わないという話も近ごろよく聞きます。まるで世にあふれる情報や知識を拒否しようとするかのようです。さて、どうしましょうか。モノは一通りあつて食べるにも困らない社会です。いかにして必要なモノ以外を持たないか、いかに必要な栄養に限って摂取するか、いかに余分なモノを食べないようにするかということが根本課題です。

しかし、教育はちがいます。俗に「教師の仕事は知識の切り売りだ」とか、「学生は金で知識や学歴を買う」とか言われます。だが、それは教育の表面です。根本ではありません。教師が十分な知識を備えるべきですが、単に知識を伝達するものではありません。知識を教えるのではなく、知識で教えるのです。知識を通じて生徒を変化、発展させることなのです。教師は生徒を「教え」「育て」、生徒には「学び」があります。市場におけるモノのやりとりとはちがった人と人との相互変化が目的です。生徒が変化、発展するだけでなく、教師にも変化、成長があるのです。

ところが、近ごろの子どもたちは自分が変わるこ

と同時、人格を変える力を持つのです。

2007. 4. 1

月刊通信

はなしがいい

第249号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円千共）

前号では、資本主義的な商品取引の観念が学校の教室に入り込んでいくという考えを紹介しました。簡単に言うと、教室は市場であって、「売り手」の教師の「知識」と、「買い手」の生徒の「不快」との売買が行われるという考えです。ただし、これはあくまで仮説です。確かに教室の現象を考える一つの手がかりにはなりますが、それが教室の全貌を表すわけではありません。学ぶことや教育について、もつと全体をとらえられる理念はないでしょうか。当面の問題に対処するとき、どのような方法をとるのか、その導きとなるのが理念です。直接の対処方法を教えてくれるわけはありません。しかし、さまざまな方向の中から、私たちが進むべき方向を示してくれそうです。それで、ある地点に立ったとき、歩みだす一歩が定められるのです。

●『生きるということ』の原理

わたしが手がかりとするのは、エーリッヒ・フロム『生きるということ』（1977紀伊国屋書店）です。フロムは、「持つこと」と「あること」というこ

とばを生きることの二つの原理としています。本の広告文には次のように書かれています。

「持つこと」と「あること」は、人が生きてゆく上での二つの基本的な存在様式である。財産や知識、社会的地位や権力の所有にこだわるのか、それとも自分の能力を能動的に発揮し、生きる喜びを確信できる生き方を選ぶのか。」

この原理は「生きる」ことについての基本態度なのですが、これが日常生活のさまざまな方面での生き方のちがいとなって現われてきます。つまり、私たちが日々何を目ざして生きるかという選択基準になるのです。もちろん、教育も例外ではありません。

第二章では、日常経験における「持つ」ことと「ある」こととの比較が、「学習、読書、知識、信念、愛」などについて語られています。「持つ」こととが、資本主義社会の思想ならば、「ある」ことは、時代を超えた人間の生き方の理想といえます。

たとえば「学習」については、次のようなちがいがあります。「持つ」様式の学び方では、学生たちは講義に耳を傾け、しっかりとノートに書き込みます。

筆記したものを暗記して試験に合格するためです。しかし、その内容が自らの思想体系の一部となったり、思想を豊かに広げたりはしません。それに対して、「ある」様式の学び方では、あらかじめ自分なりの疑問や問題があります。講義に耳を傾けながら、自分の思考を刺激する新しい疑問、新しい観念、新しい展望に反応します。聞いた知識を記憶して家に持ち帰るわけではありません。自分の思想が動かされたり、変化したりするのです。本来の「学習」とはこのようなものです。ここには、商品取引としての知識のやりとりはありません。じつは、教育を商品取引と仮定する考え方が、教育の本質なのかどうかについて、改めて検討するべきなのです。教育の理想と目標を、何に置くかが根本の問題です。それによって、教育の全体方向が変わってきます。さらに、教育の問題を、狭く政策問題に限るのではなく、広く人間の生き方の基本と考えるなら、社会のあり方にまで及ぶはずです。その道を示すことが思想というものの役割なのです。

●「読書」とは何か

また、教育には関係の深い「読書」についても違いがあります。「持つ」様式では、読書は消費の対象です。小説の筋を追って、主人公が死ぬか生きるかといった結末をたどります。それは物語を「持つ」ことです。主人公とともに人生を考えたり、共有したりすることはありません。哲学や歴史の本を読むときでも、提供される知識を「持つ」のです。

もちろん、「読書」の基礎には知識の獲得があります。しかし、そこにとどまるのではなく、知識を得るとともに、自らの疑問や問題について著者に問いかけ、話しかける必要があります。その過程を体験するような読書が、「ある」様式の読書なのです。

声で読む読書ブームを生み出した斎藤孝氏の読書論も、どちらかといえば「持つ」様式です。とにかく、一度、声に出して読みとおすことを薦めます。つまり、声で読むことが、本の「消費」となり、消費の意欲を満足させるわけです。まさに、資本主義の消費文化にふさわしい読書論です。

たしかに、読者は本を商品として買うことで、そ

れを「持つ」ことができます。さらに、声に出して読めば、本の「消費」となります。しかし、重要なのは、著者の思想と自らの思想とを突き合わせることで、思想の交流をすることです。それを繰り返すことが、「ある」様式の読書なのです。

●「知識」と「情報」

フロムは「知識」については、とくに深い考察をしています。(傍点は引用者)

「知識を持つことは、利用できる知識(情報)を手に入れ、保持することである。知ることは機能的であり、生産的な思考の過程における一つの方法としてのみ役立つ。」

「持つ」ときにはデータとして保存されるだけです。その状態では、死んだ知識です。それに対して、「ある」ときには、知識は生きてはたらくのです。

また、「知ることは、私たちの平常の感覚的知覚の欺瞞性に気づくこと」だとも言います。

「知ることは、それゆえ幻想を打ち砕くこと、幻想から覚めることに始まる。知ることは根元まで、

ひいては原因にまで達するために、うわべを突き抜けることを意味する。(中略)絶えず真実に、より一層近づくために、うわべをつき抜け、批判的かつ能動的に努力することを意味する。」

このような視点から見るとき、学校での教育はどうなるでしょうか。フロムは次のように語ります。

「私たちの教育は一般的に、人びとが知識を所有として持つように訓練することに努め、その知識は人びとがのちに持つであろう財産の量とだいたい比例する。(中略)学校はこれらの全面的な知識の詰め合わせが生産される工場である。」

教育、学校とは言っても、それは実際の現場で、人びとがどれだけ理想をもって行動できるかにかかっています。もちろん現実社会にはさまざまな制約があります。しかし、現場では教師は生徒と向き合い、親は子どもと向き合い、人は人と向き合います。そこで問われるのは、それぞれが生きる理想とし、目標とする原理です。「ある」様式と「持つ」様式のちがいは、私たちが生きる方向を示す一つの手がかりとなるでしょう。

2007. 5. 1
月刊通信
はなしがい
第250号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX. 03-3445-6499
郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円千共）

このところエーリッヒ・フロムに凝っています。前回紹介した『生きるということ TO HAVE OR TO BE?』（佐野哲郎訳1977年伊國屋書店）には続編がありました。『よりよく生きるということ The Art of Being』（堀江宗正訳2003年第三文明社）です。原語に忠実に訳せば、「〈ある〉ことの技術」とか、「〈ある〉生き方のわざ」とでもなるでしょう。フロムは一九七六年に前著を刊行して、一九八〇年に亡くなりました。その後、前著から外して残されていた原稿をまとめたのが後著です。これはフロムが前著に加えるのを躊躇した部分です。というのは、流行のなんとかセラピーといった精神療法のハウツー本として読まれることを危惧したからでした。

●〈ある〉様式の生き方

フロムは、生きる原理を〈持つ〉様式と〈ある〉様式の対立と見えています。〈持つ〉様式は、現代の産業社会で高度に実現されています。それをフロムは〈市場的性格〉と名付けています。

「自分を商品として経験すること、そして自分の価値を〈使用価値〉としてではなく、〈交換価値〉として経験することにもとづいている。」

たとえば、本は市場で〈交換価値〉として買い取られます。持っているだけでは〈使用価値〉は生じません。同様に、人間は人間として「生きる」ことに価値があるのに、市場で売買される価値で見られます。タレントなどが「売れる、売れない」と評価されるのも、当人の実力の価値とは別の次元です。

それに対して、フロムは〈ある〉様式をすすめます。それは古くからさまざまな思想家が理想としたものです。インドのヴェーダ教や日本の仏教、禅、ユダヤ教、キリスト教などに共通する考えだといえます。そして、後著では、〈ある〉様式の生き方についての技術ないしはコツを展開しているのです。

ただし、フロムは〈ある〉様式の生き方は、社会を変えようというのを抜きには実現しないと考えています。人間が自らの「大いなる解放ないし解脱」を完全に実現するには、政治的、経済的な条件からの外的な解放を条件としますが、そのとき忘れられ

がちな内的な面の解放があります。それは、「社会の暗示装置」に縛られる人間には気づきにくいものです。フロムは、「鎖がなくても人間は奴隷になり得る」といいます。

「ただ単純に、人間の外にあった鎖が、人間の内に置かれてしまっただけなのである。社会の暗示装置が、ある欲望と思想を人間に充填し、そしてそれらの欲望と思想が、外的な鎖よりもずっと完全に人間を縛り付けている。」

〈ある〉様式の理想とは次のようなものです。

「人間本性のモデルにもっとも近接するように、言い換えれば、人間の実存の諸条件に従って最もよく成長するように、そしてそのようにしてその人が潜在的にそうである所のものに成るようにと、自己自身を発達させることである。」

わたしは、「薔薇ノ木ニ／薔薇ノ花サク／ナニゴトノ不思議ナケレド」(『白金ノ独楽』)という北原白秋の詩を連想します。ただし、社会を変えろという大前提を抜きに考えると危険です。社会変革ぬきの「個人」礼讃は現状への安住を生みます。流行

の「みんなちがってそれでいい」とか、「ナンバーワンよりオンリーワン」などは危ういコトバです。かといって人間は現状の社会で生きねばなりません。そこでフロムは生きるための技術を本に書いたわけです。実際に、フロム自身もヨガや禅などに関心を持って実行していたそうです。そもそもフロムの師であるフロイトの精神分析が、精神療法の一つだったのですから、当然といえるかもしれませぬ。

●社会変革のための政策

フロムの社会変革の展望は、前著の後半に八つの政策として書かれています。人間の性格構造の変革を基礎にした社会変革の指針です。

(1) 経済的広告、政治的宣伝における洗脳的方法の禁止——経済広告は、必要ではないものを欲しがらせて買わせませぬ。政治宣伝は欲しくもない代表者を選ばせませぬ。しかも、それらの方法は受け手の批判力を失わせ、情緒的な感性を狂わせるものです。

(2) 豊かな国民と貧しい国民との隔たりを埋める——国外では、豊かな国の国民が貧しい国の国民を搾

取しています。日本の国内でも日本人と外国人との生活格差があります。さらに、一般の国民の中にも貧富の格差が生まれています。

(3) 年間収入保障制度の導入——最低賃金制は時給に限られます。これは年間の収入保障です。すべての人が働くか否かを問わず、無条件の権利としようというのです。「ペットに認めながら、人間には認めない権利」とはフロムの鋭い批評です。

(4) 家長長制支配からの女性の解放——歴史上、女性の地位が転落したのは、剰余生産物を得るための搾取、軍隊の組織化などがきっかけでした。男の女に対する支配は、一つの集団が他の無力な住民たちを支配するのとよく似ているといえます。女性の解放が重要なのは、現代社会の基礎となる力の原理への批判となるからです。

(5) 最高文化会議の設立——国の知的、芸術的なエリート代表によって、政府、政治家、市民に対して、あらゆる知的な問題に関する助言を与える会議です。現代社会の文化レベルならば可能です。どんな人たちが選ばれるかは、国民の文化レベルに依存します。

(6) 必要な情報を広める体制をつくる——情報公開は民主主義形成の基本です。「国家の安全のため」として情報を隠したり偽ったりせず、政治的、経済的、社会的なデータの情報が制限されないようになるのです。運営には最高文化会議があたります。

(7) 科学的研究を産業面および防衛面への応用から切り離す——フロムは科学研究のあらゆる成果を実際に応用することの危険を訴えています。人間に関する科学では、遺伝子研究、脳外科手術、精神医薬などが問題です。産業や軍事への応用については、産業、政府、軍部から法的にも心理的にも完全に独立した管理委員会の管理が必要です。

(8) 核兵器の廃棄——アメリカの防衛予算が、保健、福祉、教育の切り詰めになっていくことをフロムは嘆いています。日本ではどうでしょうか。

これらは理想に基づいた具体的な政策です。どれも三〇年前の提案と思えないほど、現代にぴったりです。決して古びてはいませぬ。今の日本にすぐ適用できるものもあります。それだけ、フロムの思想は根本的なものなのだといえます。

2007. 6. 1

月刊通信

はなしがいい

第251号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円千共）

教育の問題というと、決まって出てくるのが道徳教育です。今回は教育再生会議によって「徳育」として登場しました。名前はちがっても、その目的は同じです。あらゆる教育問題を一気に解決できる特效薬のように考えられているようです。しかし、道徳教育とは、そんなに効き目のあるものなのでしょうか。

●道徳と法律

最近、テレビや新聞で、人びとのモラルの低下の問題がよく取り上げられます。給食費の不払い、図書館の本の扱いのひどさ、本を切り取ったり、本に書き込んだりするといった問題です。また、若い人たちによる近親者の殺傷事件も目立ちます。そして、政治家や役人の汚職問題や談合事件なども繰り返されています。これらのすべての問題が道徳問題ともいえそうです。

道徳というを持ち出されるのが、明治天皇の出した「教育勅語」です。内容はごく常識的なことです。「父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉

己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ（父母に孝行し、兄弟仲良くし、夫婦は調和よく協力しあい、友人は互いに信じ合い、慎み深く行動し、皆に博愛の手を広げ）」。問題になるのは「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ（もし非常事態となったなら、公のため勇敢に仕え）」というくだりです。これが戦争への忠誠心の教育となったといわれます。

辞書には道徳について次のように書かれています。「ある社会で、人々がそれによって善悪・正邪を判断し、正しく行為するための規範の総体。法律と違い、外的強制力としてではなく、個人の内面的原理として働くものをいい、また宗教と異なつて超越者との関係ではなく人間相互の関係を規定するもの。」（『電子ブック版大辞林』）

ポイントは三つです。道徳とは、善悪の規範であり、個人の内面ではたらくものであり、人と人との関係を規定するものです。人が道徳的な行動をするのは、法律で規定された罰則などを恐れてのことではなく、自ら進んで、ごく自然に行うものです。他人から、ああしろこうしろと言われて行動している

限り、それは道徳とは呼ばれないこととなります。

●「道徳」の二つの意味

学校での道徳教育は、ややもすると強制となる危険があります。学校の持つ強制力が、自主的であるべき道徳の考えとは対立するからです。そうすると、本来の道徳の教育ではなくなってしまう。問題は、どのような道徳を、どのような形で教育するかということ。戸坂潤（1900-1975）という哲学者は、「道徳」という概念について二つの区分をしています。ここから、道徳の教育がどんな方法で行われるべきか考えることができます。

道徳という概念は、社会科学的なものと、文学的なものとの二つに分けられます。前者は、道徳律や良心や習慣などとして社会に見られる現象です。一般に考えられる道徳のことです。これは政治や法律や歴史などの学問分野から研究できます。社会において道徳がどのような意味を持つのかという問題です。しかし、これは教育に直結しません。

後者は、ものごとの意味を考えたり、行動したりするための方法です。人が道徳的にものごとをとらえるはたらきを文学的な意味で道徳というのです。

文学はモラルの探究です。人の考えが人との関係でどのように規制されるのかを明らかにします。夏目漱石の作品などは文学の典型的なものです。

文学と科学はしばしば対比されます。科学は現実の認識であって、文学は想像や空想によるものだと思われています。しかし、戸坂は文学も一種の認識なのだといいます。科学が誰にも共通する現実の認識を目的とするのに対して、文学は自分と自己にこだわる認識です。文学作品の作者も、またその読者も、それぞれが自己を通じて、現実の世界を認識します。その認識の仕方は、それぞれ違ってきます。それでも、それぞれの認識は真実なのです。

科学は人に共通する真実を目指すのですが、文学は、それぞれの人の一身上の真実をめざします。真実の認識という点ではどちらも同じです。違いは、それぞれの方法です。科学の真理があるからといって、文学の真理が否定されるわけではありません。

科学的な認識からは抜け落ちてしまう人それぞれの真実をつかむのです。それが文学的な道徳の真実なのです。ドイツのヘーゲルという哲学者は、人間の知的能力を悟性と理性とに分けています。それに従うなら、悟性を科学の真実として、理性は文学の真実とも言えるでしょう。

●文学作品による道徳教育

では、「道徳」の教育はどんな方法で行ったらいのでしょうか。わざわざ学校で特別の教科を作る必要があるのでしょうか。本来の道徳とは、その人自身が課題とするものです。ある問題を自己の問題とし、自己と対話して考え抜き、判断して行動できるように能力をつけることです。そんな能力はどこで培われるのでしょうか。

人は日常生活の中で、人と人との関わりを学びます。その手がかりになるのが文学作品です。文学作品には人の心や人と人との関わりが描かれています。人が何をどのように考えて、どのように判断し、どのように行動するか示します。人物の考え方や行動

を距離を置いて見ることができます。「人のふり見て我がふり直せ」ということが自然にできます。

文学作品は虚構の力を借りて、日常生活では見えない人の心や人と人との関係をコトバで表現したものです。わたしたちはそれを読むことで日常生活での自分の心や人との関係に気づくのです。そのためには、作品を正確に読みとる必要があります。作品に書かれた事情や人物の考えを把握することによって、そこから導かれる判断も的確になります。

文学作品の意味は文字に書かれた情報だけではありません。作品の「語り手」は、一身上の真実を示そうとする立場に立っています。人と人との関わりから生じた心情を表現しています。文字に書かれた作品の背後には「語り手」の声があります。

文学作品は必ず声に出して表現してみましよう。「語り手」のこだわっている一身上の真実を感じ取ることが出来ます。作者は「語り手」を通じて道徳の問題を問いかけます。わたしたちは自らの声で作品を表現することによって、作中のさまざまな問題を実感に基づいて検討できるのです。

2007. 7. 1

月刊通信

はなしがい

第252号

よりよい未来と教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515

電話&FAX 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円千共）

専門学校や大学で授業をしていると、学生たちがなかなか口をきかないのが気になります。わたしは三十年以上、教育に関わっています。この傾向はますます進んでいます。直接には反応しなくなっています。いったいどういうわけなのでしょう。学生たちはどのように変化したのでしょうか。

市川浩『〈身〉の構造―身体論を超えて』（1993 講談社学術文庫）は、からだと精神との関係から人間について論じている貴重な本です。ここに、現代の学生たちの人格形成について考えるヒントがあります。〈身〉というのとは、この人の独特の用語です。心と身体^{からだ}とを分けることなく一体にとらえる概念です。とくに、冒頭のわずか十ページほどの文章では、みごとに人間の成長と発達がまとめられています。ここを読むだけでも、この本には価値があります。そのポイントを引用して紹介しましょう。

●〈身〉の発達と人生

〈身〉の発達は、子どもだけではありません。人間の生涯を通じて行われるものです。おとも、日々、

〈身〉を発達させる過程にあるのです。

○身ごもり（共生） 「母親の胎内にあつて身ごもりされている状態です。（中略）いわば母親と共生している状態——それが最初の人間の状態です。」

宗教や芸術が理想とする「胎内憧憬」の境地です。○出産（第一の受動的分離） 「肉体的・生理的に共生していた状態から、独立した存在となる（身二つとなる）人間にとっての最初の分離です。（中略）この分離は、自らの意志によるものではありません。生まれるということは生み出されることであり、受身です。」

○乳離れ（第二の受動的分離） 「文字どおりには母親の乳房（授乳）から引き離されることですが、出産とちがって生理的な意味以上に心理的な意味を強くもっています。（中略）乳離れにたいしては、抵抗することができ、すでに一つの心理的な事件だからです。（中略）乳離れがうまく行われないと、いろいろな退行現象が現れるのはよく知られているとおりです。またその代償行為として、大きくなって、毛布や枕や人形や肌着などをいつまでも手放さ

ず、かんだり、吸ったりします。」

人間は一方で成長を願いながら、他方では退行したがるという矛盾を抱えています。今の若者たちは幼児期へと退行したがっているように見えます。

○**第一反抗期**（第一の能動的分離） 「三歳から五歳頃になると、自分の方から積極的に分離しようとする反抗が現れます。これは共生状態からの能動的分離であるという点で、きわめて重要な意味を持ちます。初めての自我の目覚め、自己の独立のはじまりといえるでしょう。子供は人に見られることを恥ずかしがり、人みしりをし、照れるようになります。他人から見られていると考えることで、見られている自分を強く意識するのです。（中略）だから自己意識は、他者意識と同時に生まれるとあってよいでしょう。」

●コトバの発達と自我

私が注目したのは、三歳から五歳ごろのコトバの発達と自我の目覚めとの関係です。

「自我がめざめる頃、子供は言葉を習得します。

ここにも言葉を内面化することによって自己が形成される、という相互性があります。ともあれ子供の最初の言葉は、ほとんどが母親の注意をひくための伝達の言葉です。しかしまもなく一種のひとり言（ピアジェの言う自己中心的言語）が出てきます。

女の子のお人形遊びやお母さんごっこにも、男の子のロケット遊びや積み木遊びにも出てきます。（中略）自分の行為を描写するというより、言葉はまだ行為の一部なのです。（中略）ところが学齢期になると、ひとり言が急に少なくなります。でもこれは消えてしまったわけではありません。（中略）行為としての言語が内面化されて、考える言葉（内言）になったのです。」

内言（心の中のコトバ）と外言（口に出すコトバ）との関係で、子どもたちの自己意識が次のように育って行きます。

「外言は、自己が他者にかかわる行為の一面であり、内言は自己が自己にかかわる行為の一面です。この二つの関係のダイナミックな統合の過程で自己が形成されます。言葉はこの二つの関係を生きることに、

演じることであると同時に、この関係を語り、表現するメタ行為でもあります。」

つまり、話すことと考えることと、どちらもコトバを使って行われるのです。

●思春期の子ども

そして、子どもは思春期を迎えます。

○**第二反抗期**（第二の能動的分離） 「思春期は第二の反抗期です。この再度の反抗という自覚的・能動的な分離を通して、人間は三つのタイプの分離を体験します。」

「第一は、他者からの自己の分離です。母親や家族からの分離にとどまらず、広く社会から、さらには宇宙からも自己を分離する。分離は不安を伴い、しばしば自殺を考えるほどに絶対的な孤立を感じさせます。」

「第二の分離は、自分の中に起こる内面的な自己と外面的な自己の分離です。外に現している自分と、自分の中でとらえている自分とのちがいが、その明確な分裂に悩みます。外に対して本当の自分を出せず、

いつも演技をし、仮面をかぶっているように感じます。（中略）それはしばしば深い自己嫌悪の感情さえ生むでしょう。」

「第三の分離は、男と女の分離です。男女の性徴が明瞭になるにつれて、男性、あるいは女性という異なる性をもった他者を強く意識するようになります。異性に対しても、自分を恥ずかしいと感じ、隠したい気持ちと、自分をもっと強く表現したい気持ちの間で引き裂かれます。一方は自己防衛的・自己隠蔽的であり、他方は攻撃的・自己顕示的な欲求です。

この二重性は、思春期の特徴である照れと銜てむいとなつて現れます。こうした三つの分裂を抱きながらわれわれは動的に自己を統合してゆきます。」

わたしは児童心理学の本を読んだこともありすが、改めて人間の発達についての知識が大事だと思えます。最近、若い人が事件を起こすのを見て、時代の変化とともに異常な事態が起こっているかのように思っていました。しかし、精神の発達段階を基礎にして、子どもたちをどう教育し、どう育てるべきか考えることも重要だと気がつきました。

2007. 8. 1

月刊通信

はなしがいい

第253号

よりよい未来と教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円千共）

「日本語ブーム」はブームとして過ぎ去ったかのようですが、声の能力を育てるといふ実践を続けている人がいます。米山文明さんです。243号（2006/10）でこの人の著書『声と日本人』（19983平凡社選書）を紹介しました。現在、八十二歳ですが、発声教育の実践と研究を積極的に続けています。その成果を示すのが、今年の六月に出版された『美しい声で日本語を話す』（2007平凡社新書377）です。

米山さんは日本の発声教育について嘆いています。「日本では「発声」に関する教育、指導方式がほぼ全面的に欠落していた」

そして、「発声の土台をつくる」ために、次のようなプロセスが必要だといっています。

「生後間もなくことばを習得する段階から始めて、保育園や幼稚園、義務教育段階での教育がきわめて重要になります。年齢的に体と脳の発育に対応した発声教育、声帯をも含めた全身の肉体的発育と、ことばを含めた知能の発育に合った発声教育を組み立てるべきだ」

米山さんは、「音声言語医学」を専攻した人です。

医学博士で、発声指導と声帯の治療については有名です。日本の声楽家や声を職業とする人たちの指導や治療をしたり、外国から来た有名な声楽家も、声にトラブルがあると米山さんの門を叩いています。

● 声の教育の必要性

声の教育というと、わたしは鈴木大拙の発言を思い出します。（「大地と宗教」『一禅者の思索』1987講談社学術文庫）

建物がコンクリートになることによる子どもたちの声の変化を「耳感」の変化としてとらえています。「木造の建物は柔らかく響く。（中略）コンクリートになると少しも吸い込まれずに、直ちに反響してくる。そうすると声が堅くなる。堅くなるということは、声に潤いがなくなってしまうことで、この点を大いに考えなければならぬのであります。声を養うところの学校の壁がことごとくカンカンと鳴ったら、これが音楽教育には非常な影響を及ぼすものと思われまふ。」

発声教育はまず子どもたちにとって必要なのです

が、先生たちも学ばねばなりません。ところが、今の教職課程では、生徒の前で話したり、朗読したりする能力がつくようなカリキュラムは組まれていません。さらに驚くべきことには、明治以来、小学校の音楽教育は、発声に関する部分が除外された教科書で行われてきたと言うのです。

その事情はこんなことです。日本の発声教育は、明治八年（1875）、文部省の役人・伊沢修二が音楽教育の視察のためにアメリカのボストンに留学したことからは始まります。二年の留学の後、持ち帰った二冊の教科書が、発声教育のもととなりました。それが日本語に訳されて『音楽捷徑』（1884）、『音楽指南』（1883）という、最初の小学校音楽教科書になります。

ところが、近年、ある研究者が二冊のアメリカの教科書と日本の訳本を比較してみたら、原本の「発声」にかかわる記述のほとんどすべてが訳本では削除されていたのです。米山さんも愕然がくぜんとしたといいます。削除の理由は不明ですが、奇怪くわいとしか思えないそうです。

●米山さんの発声教育

この本には、発声と発音について読みどころがいろいろあります。さすが発声の専門家だといえる鋭い指摘が目立ちます。たとえば、「声」は「気流」である——狭い隙間を吹き抜けてゆく風が作る「唸り現象」であるとか、母音の発音の順序は「イ・エ・ア・オ・ウ」が自然の流れであるとか、「口を大きく開ける」という指導方法はマイナス面のほうがはるかに大きいとか、「腹式」呼吸とは、単純にお腹を出したり引つ込めたりすることではないとか、これらは常識への批評になっています。

米山さんは発声の教育を、声を出すという肉体的なことだけで考えてはいません。うっかりすると、声の教育というと、声の表現力や語るべき内容から切り離された「美しさ」について語られがちです。しかし、米山さんの実践を見ると、声とコトバの結びつき——声と心を結びつけることを目指していることが分かります。

声の訓練の実践者を何人も外国から招いて、様々な研究をしています。その中でも次の例は、米山

さんの関心をよく表しています。ドイツとスイスから招いた三人の講師が、それぞれ専門分野の歌を披露した後、二人が「即興演奏」を行ったそうです。この意味が本の記述からは理解しにくいのですが、おそらく、ジャズのスキヤット演奏のようなものなのでしょう。

「二人の声の変化の多彩さと、それぞれの声の独自性と協調性の組み合わせかたはまさに千変万化で、声の高低、強調、持続の長短、特に音色の変化の複雑さは圧巻でした。／「ことば」は一つも出てきませんから意味はありませんが、会場全体はシーンと水を打ったように静まりかえり、聴衆の息遣いさえ聴こえそうな雰囲気でした。」

米山さんは、その感動を三点にまとめています。
（丸数字は引用者）

「この体験は、①コミュニケーションの道具としての声に、ことば以外に多様な応用のしかたがあるかということ、②「呼吸と声」の表現方式が限りなく無限に近いという事実、③声と音の感覚の習得が実際の舞台や社会生活でいかに表現され得

るものかを教えてくれました。」

米山さんは声とことばとを分けて考えていますが、わたしはコトバと声との相互協力を考えます。ただ、コトバを発したからといって、なかなか人に伝わらないのはなぜか。ここにコトバと声の問題があります。コトバと声が協力すれば、よりよい表現が可能です。意味もあつて感情もあるという表現です。

米山さんはもともと声帯の医学的な研究から出発した人ですから、そう考えるのでしょう。それに対して、わたしはコトバの研究から出発して声にたどり着いたので、表現としてのコトバの重要さを感じています。「コトバは単に意味の伝達に限定されるものではないのだなあ」という思いです。

わたしがコトバに関心を持ったのは、自らのコトバの能力を高めたいという思いからでした。コトバを知識として知るだけでなく、現実生活のなかで「生きたコトバ」としてはたらくようにしたいと思っています。声のコトバの能力は日常生活においてとくに重要です。「もの言う自信 生きる自信」とはわたしの師・大久保忠利のコトバです。

2007. 9. 1
月刊通信

はなしがい

第254号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX. 03-3445-6499 振替: 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円 (1年1,500円共)

子どもの教育について、しばしば父親と母親の役割が問われます。一般的には、子育ては母親の役割、父親は補助的なものだと考えられています。父親が仕事に出て、母親は家庭を守る。母はやさしく、父はきびしくというようなわけです。

わたしの父と母は、子どもの年代によって役割を分担していたようです。母はわたしが小学校を卒業するまでの担当でした。わたしが中学生になったとき、母は自らはっきりと宣言しました。

「これまで、お母さんがお前の教育をしてきたけれど、もうお父さんと交代だ。これからは、お父さんが面倒を見ることになるだろう」

わたしは確かに母親に育てられてきました。わたしの家は父と母とで商売をしていたので、母は商売と家事とに追われていました。わたしは母にかまわれずに自由に行動できました。母は特別な規制をしませんでした。しかし、何かまちがったことをしたときには、母の前に正座させられ、説教されました。今になると、いったい何を叱られたのかはほとんど覚えていませんが、何度か弟と二人並んで座らさ

れたことがあるのは、兄弟喧嘩だったのでしょう。

●母のやさしさ・父のきびしさ

こんなことを考えたのも、相変わらずハマっている内田樹さんの本を読んだからです。今回の本は、内田樹・鈴木晶『大人は愉しい』(2007筑摩文庫/2002単行本)です。インターネットでの交換メールを本にしたものです。

父親と母親の役割というと、一般的には、父のきびしさ、母のやさしさというのが常識です。しかし、「きびしさ」と「やさしさ」という言葉の意味は曖昧です。また、この二つのうちどちらを強調すべきかは時と場合によって変わるものです。問題は今の日本では、どちらのどんな役割が必要なのかということですが。

近ごろは、どうやら「きびしさ」に重点があるようです。マスコミでしきりに報道される政治家のモラルの低下などと同列に、教育でも「きびしさ」が要求されています。母親への「やさしさ」の要求などは、どこかへ吹っ飛んでしまったようです。子ど

もたちにとっては辛い状況です。

●母の役割とは何か

内田さんは、子どもを成熟させる母親の役割を三つの段階でとらえています。モデルとしているのは『坊っちゃん』の「清」の考え方です。

- (1) 自分の子どもを他と差別化すること
- (2) 子どもを全面的に承認すること
- (3) その気にさせて社会へ送り出すこと

(1) は、子どもの良さと個性を発見することで、一人ひとりの人間は他とはちがった唯一の存在であるという考えです。母親にとって自分の子どもは絶対的な存在で、他から区別されるものです。そこで当然の帰結として、(2) 子どもの「全面的」「承認」が生まれます。(3) 「その気」とは、子どもが自信と勇気をもって社会に歩み出すことです。内田さんは「3段階カタル方式」と呼びます。これは、子どもの教育ばかりでなく、人間と人間の関係の発展段階にも応用できそうです。最初から人を嫌ったり、承認しなかったら、人から学ぶことは

できません。

さて、内田さんは今日の母親の役割を次のように述べます。

「このうちの第三段階にあたる「立身出世」に「母」の関心が集中しすぎたために、それ以前に果たされておくべき「差別化」と「承認」がおろそかになっている」

(1) と (2) は、(3) を進めるための前提条件であり、土台です。夜回り先生として知られる水谷修さんが強調する「子どもを認めてやる」「こどもをほめてやる」という教育方法とも共通の考えです。ところが、今の母は次のような教育をしているのではないかというのです。

「立身出世」部分だけに「母」の関心が向かうということは、××ができたら××ちゃんに勝つたら、私の子どもとして承認してあげる」というような条件的な承認を行うということになります。つまり、「母」が子どものアイデンティティを子ども相手に「取引カード」に使うということです。」

「子どもたちは「まず母の承認を得る」ところから続け」た、と。

しかし、母親が子どもを絶対的に承認することによる弊害もあります。とくに核家族において子どもは閉鎖的に保護されがちです。それを避ける一つの制度が「もうひとりの親族」です。内田さんはその考えをレヴィー・ストロースの示した「親族の基本構造から考えつきました。家族の基本構造は「父母と子」の三人ではなく、「父母と子と伯叔父(おじ)」の四人であるということです。この例として映画『寅さん』シリーズのストーリーが挙げられています。

そして、母親の役割については、次のように結論づけられます。

「親」というのは、ある種の欠落や過剰ゆえに(というか、欠落や過剰込みで)機能するものであって、「パーフェクトな親」と「パーフェクトな子ども」のペアというのは、それを望むこと自体が「狂気」だと私は思います。」

今あらためて、わたしの母の叱り方を振り返ると、「取引カード」のようなものはいりませんでしたが「お前は私の子どもだから、こうなってほしい」という絶対的なものを要求していました。それが母親の愛情というものなのでしょう。

「母からの承認」の意義については、鈴木晶さんがフロイトの言葉を引用して解説しています。

「母親に特に可愛がられており、優遇されたりした人間は、実人生において、往々にして英雄的に見え、かつ実際の成功を勝ちうるどころの異常な自信かの抜きがたき楽天主義を示す。」

そのあとさらに、フロイトはゲーテを例にして書きます。ゲーテは「母親の絶対的な寵児」であり、「生涯、あの征服者の感情を、あの成功の確信を抱

わたしは内田さんの本を読むといつもホッとして生きるのが楽になります。今回の結論も、子育てや人間関係で迷う人たちには心安らぐものでしょう。

2007. 10. 1
月刊通信

はなしがい

第255号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円 千共）

私たちが身につけた知識には二とおりあるそうです。一つは、いつ、どこで、だから、どのように学んだのか分からない知識です。それで、話したり書いたりするときには、もともと自分の知識であったような気になっています。ほとんどの知識がこちらです。もう一つは、学び方をはっきりと自覚している知識です。だれもが先生の思い出と結びつくような学生時代の経験があるでしょう。わたしも中学生のとき国語の先生から落語の「寿限無」の詳しい解説を聞いたのをよく覚えています。

●わたしの母の教育

前号の内田樹さんの母親論に刺激されて、わたしも自分の母の教育について思い出すことを書いてみます。わたしが成人してからも、母はしつけの不足についてよく口にするがありました。

「私が店の仕事で忙しかったから、世間のことについて十分なしつけができなくてすまないね」

母が言うのは、冠婚葬祭などの世間つきあいについての細かな振る舞いのことです。そのたびに、わ

たしは思ったとおり、「そんなことまで母親の役目ではない」と答えました。

たしかに、こんなときにはこうするべきだといったことを母から直接に教えられたことはほとんどありません。しかし、「人はこういうときには、こういう気持ちがするものだよ」という言い方を母はよくしました。父が世間の知識やことわざを語るのとは対照的でした。

わたしが母から学んだことは教え切れないほどあはらずです。しかし、いつ、どのように学んだか思い出せる経験は限られています。

母は父と二人で事務用品の販売の仕事をしていた商人ですから、人と言い争うような場面は見たことがありませんでした。しかし、一度だけ母が激しい物言いをしたことがあります。

わたしが小学校三、四年生のころです。わたしの家は県道に面した文房具店で、小学校へ向かう道の角から二軒目でした。家を出て左へ曲がって五十メートルほど先の突き当たりが小学校の正門でした。

秋の交通安全週間でもあったのでしよう。小学校

へ通じる道の横断歩道には、黄色い旗を持った交通整理の母親が立ちました。

その朝、わたしが家を出て左へ回って歩き始めると、旗を持った婦人に制止されました。

「ダメよ！ 歩行者は右側通行。右側を歩かなきゃ」

わたしは困りました。家を出て学校へ行くには左側を歩くしかありません。すると、わたしを見送っていた母が前に出て事情を話してくれました。

わたしがその家の子どもであり、右側通行するためには、いったん目の前の県道を渡らねばならない。その方がよほど危険だ。横断歩道を渡るにしても左側を歩くしかないのだ――そんなことを母はやや興奮気味に話しました。

今から考えても、あのときなぜ母があんな熱弁を振るったのか不思議な気がします。しかし、そのときわたしは、人に理解をしてもらうために、事情を説明することの大切さを学んだ気がします。

●母の作文指導

学校の勉強についても母から学んだ記憶はほとんど

どありません。父が配達や営業で仕事に出た間、母は電話と店の番や帳簿の整理のほか、家事に追われていました。しかし、作文の書き方について、母が助言してくれたのを覚えています。

夏休みの宿題の日記を書くときのことで。これも小学校三、四年生のころです。夏休みも終わりに近づいて、わたしもあせっていたのだと思います。

わたしが書きあぐんでいると、母は庭の松の木の本のスイカの芽を指さしました。

「ほら、見てごらん。スイカが芽を出している。あれを書けばいい」

「えっ」

芽の先に黒い袋をつけて頭をもたげたスイカの芽がパラパラと見えます。そんなちっぽけなもの書いても仕方がない。もっとほかに日記に書く価値のあるものがありそうだと思います。

「庭の松の木の下に、小さなスイカが芽を出した。みんなで食べたスイカの種だ。一本、二本、三本と……」

わたしの迷いなど気にせず母は歌うように小声

でつぶやき始めました。そのことばには詩のようなリズムがありました。わたしは母のことばを写して日記に書いて提出しました。あれから四〇年以上経った今でも母の声が聞こえるような気がします。

●母の性教育

わたしが中学校に入ったとき、母は父にわたしの教育をゆだねて口だしをしなくなりました。性教育も父の役割だと考えたのでしょうが、父は何もしませんでした。しかし、その後、母が性の問題について触れたことがありました。

わたしが大学に入学した年の夏休みのことです。

帰省して母と話していると、何がきっかけだったか覚えていませんが、母は急に改まった顔になって話し始めたのです。

「女の子はねえ、男とちがって、傷つきやすいものなのだよ、心も体も。お前も、わかるだろう？」

母がわたしの顔を見つめます。わたしももうおとなですから、性的な関係を意味していることは分かりました。黙ってうなずくと母は続けました。

「だから、やさしくしてやらなきゃいけない」
わたしはまたうなずきました。しかし、なぜ母がそんなことをいきなり言い出したのか、さっぱりわかりませんでした。当時、わたしには親しい女の友だちはいませんでした。高校時代を男子校で過ごしたので、女の友だちとの付き合い方には戸惑いを感じている時期でした。

「女にはやさしく」という取り立てて具体的な意味を持たないことばでしたが、そのとき、わたしの心にしっかり刻みこまれたのは確かです。そして、母もひとりの女なのだ気づいてハッとしました。

内田樹さんは、「師」たるものとの出会いについて、二つの要素が必要だと述べています。一つは自分よりもずっと優れたものがあるという先人への尊敬心です。もう一つは、尊敬の基盤となる「愛」でも言えるような人間関係です。

母親による教育などというところ、どのような手段をとるべきかとか、技術的な方法の検討に偏りがちですが、このような師弟関係に通じる原理的なものであってよいのかもしれない。

2007. 11. 1
月刊通信

はなしがい

第256号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円 千共）

最近、気になる話を聞きました。小学校の教科書では文章が書かれていますのは国語くらいで、ほかは図や表ばかりだということです。小学生の子を持つ母親の話です。だから家で予習や復習もできないし、母親も教えられないということです。そのかわり参考書が売れているのだそうです。困ったことです。

中学生・高校生になって本が読めないとか、文章を書く力がないとかいうのもムリはないと思います。わたしは昨年からある大学で文章力をつけるための講義をしています。学生の読解力には不安があります。文章を書く力は、文章を読む力と切り離せません。というのは、文章力の半分以上は、読む力にあるからです。

文章はいきなり冒頭から書き始めて末尾で書き終わるといえるものではありません。ふつうはいったん下書きをしてから手を入れていくものです。あるいは、少しずつ断片的に何行かの文章を書いて行って、それぞれの部分の関係を考えて組み立てるものです。この文章も現にそのやり方で書いています。

下書きができれば、何度も繰り返し読み返しながら

ら、手を入れて文章を完成させるのです。その場合、自分の文や文章を正確に読みとらねばなりません。書かれた文や文章で何が表現できたか、何が表現できていないか把握しなければ、手が入られないからです。また、手を入れる前と後とで、文章がどう変わったのか、それが読み取れなければ書き直せないからです。

●文章を読むということ

そもそも、文や文章の正確な読み方というものが、学校教育では教えられているのでしょうか。また、おとなたちには、文や文章を正確に読み取る力がどれほどあるのでしょうか。

世間には、読書論や本の読み方について書かれた本はたくさんあります。本の全体から情報を取り出すような読み方が問題にされています。しかし、細かい文や文章の読み方は問題になりません。文や文章の読み方は本を読むための基本です。それなのに文や文章どう読むかという基本的な方法を書いた本がほとんど見当たらないのです。

学校教育においても、読み方の指導は問題を解くための読み方、あるいはテスト対策のようなものばかりです。普通の人が、普通に文章を読むときの読み方について書かれた本もほとんどありません。そこで、わたしは、文や文章を読むための方法としていくつかのポイントをあげてみることにしました。文字の読み方といった常識的なことは除いて、こんなやり方をするとうや文章が理解できるといいう技術に絞ります。エンピツをもって印しをつけながら読むときの方法です。

●文章をよむための六つの技法

(1) 形式段落には丸数字で番号を振る

印刷された文章はひとかたまりに見えます。しかし、いくつかのブロックに分けられます。形式段落とは、行が変わり一文字下げられたところ、そのくぼみに、①、②、③……と数字を書き込みます。

(2) 文の主部(ダレガ・ナニガ)をマルで囲む

文の主部になるのは、ヒト(ダレガ)、モノ(ナニガ01)、コト(ナニガ02)の三つです。この三つ

しかありません。たとえば、「福田首相」はヒト、「お金」はモノ、「政治」はコトです。文の主部を見つけたら、どの種類になるか確かめてみます。

(3) 述部(ドウスル/ドウダ/ナニダ)に線を引く

文の述部は、①ドウスル(動詞)、②ドウダ(形容詞・形容動詞)、③ナニダ(名詞)の三つのいずれかです。これも線を引いてから種類を確かめます。文の型を知ること、文章の内容理解も深まるので

(4) 長い名詞句は山カッコで囲む

文の主部・述部は一つの単語で成り立つことは少ないものです。それぞれに修飾語がついて長くなる場合があります。たとえば、次のような長い文でも山カッコで囲むと単純な骨組みが見えます。

「山田くんのお母さんが買い物をしているときに隣の魚屋からサンマを盗んで逃げた猫[▽]がいる。」
↓「猫がいる。」

山カッコの結びの語句は必ず名詞です。右の文では「猫」です。一般の名詞のほか、「こと、もの、とき、ようす……」などがあります。もう一つよく

使われるのが「の(準体助詞)」です。このような形式的な名詞は山カッコの外に出して四角で囲み

(5) 並列に並んだ語句に線を引き丸数字をつける

文中にいくつものモノ・コトなどが並べられることがあります。「――と――と……」「――とか、――とか、……」「――し、――し、……」「――たり、――たり、……」などの形をとります。一項目ずつ脇に線を引いて、頭のところ①②③……と丸数字をつけます。より大きなレベルで並んでいる場合には、(1)(2)(3)……、A、B、C……などの記号を使います。

(6) 文をつなぐコトバは四角で囲む

文がつながると文章になります。文は句点(。)で切れます。ただ文だけが並ぶのではなく、文と文との間につなぎのコトバが入ることもあります。「しかし、そして、つまり、……」などのコトバはすぐにわかります。また、次のように文の中に埋まっているツナギのコトバもあります。「――(する)と」「――だが」「――ので」「――(する)ため

に」などです。

●印しつけから学ぶこと

できるだけ文法用語を使わずに書きました。小学生からおとなまで、だれもが気軽に実行できるようにです。まず実行してみることです。たった六つの作業です。でも、文法の力をつけるための基本項目が入っています。

印しをつけて読むことが、文と文章の組み立てを考える出発点になります。文にも文章にも型があります。型は理解の手がかりです。印しをつけることで型が見えるのです。型にたよって文章を読むうちに、型を外れる表現を発見するでしょう。

そして、このほかの印しが必要になったらしめたものです。ご自分で新しい印しを工夫して、より正確に、より深く、より速く読めるようになってください。ところで、この文の「より……」のところに①②③とつけて線を引きましたか？

明日とは言わずに今から印しつけを始めてみませんか。そして、ほかの人にもすすめてください。

2007. 12. 1
月刊通信

はなしがい

第257号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円 千共）

『論語』といったら皆さんはどんなことを思いま
すか。わたしはこれまであまり関心を持っていま
ませんでした。というのは、戦前の道徳教育の柱とな
った古い考えだという印象があるからです。しかし、
先月、表現よみの独演会で中島敦の作品「弟子」を
発表したのを機会に関心を持つようになりました。
そして、『論語』の新しい翻訳に出会いました。
加地伸行全訳注『論語』（2002講談社学術文庫）で
す。ページの構成が美しく、こなれた読みやすい訳
です。ぱらぱらとあちこち開いて読んでいるうちに、
二千五百年も前の教えとは思えないほど、現代的な
意味があると思うようになりました。

『論語』は儒教道徳の元祖といわれますが、孔子
が最初から儒教を唱えたわけではありません。のち
の儒家といわれる学者たちが中国の伝統的な思想と
して体系化したのです。そして、戦前の日本では孔
子のことは通俗化され、政治に利用されました。
孔子の生きた中国は戦国時代です。小国が乱立し
て互いに勢力を争っていました。孔子は諸国をめぐ
り歩いて国の運命や政治や人生について考えました。

その背景を意識して読み直す必要があります。
今回の新訳は十年かがりで二〇〇三年に仕上げら
れました。訳者は「論語」のことばの豊かさを取り
あげて、いま「論語」を読む意義を書いています。
「いま時代は、これまでの五十年のような騒がし
い生活に対して反省を求めている。日々の表面だけ
の薄っぺらな生活ではなくて、たまたま人間として
生まれ、限られた人生の中で、精一杯へ生きようと
する▽われわれにとって、人間とは何か、生き方と
は何か、ということは、大きな重い問題である。」

●孔子と弟子たち

「論語」には、教育に関するいくつかのキーワー
ドがあります。まず、「知る」です。中島敦「弟子」
の主人公・子路は孔子の弟子です。最初、孔子に反
感を持って近づきますが、逆にその魅力に引きつけ
られて入門します。孔子は子路に「知る」というこ
とについて教えます。（カッコ内は引用頁）

「老先生の講義。由よ、君にへ知る▽とは何か、
教えよう。知っていることは知っているとし、知ら

ないことは正直に知らないとする。それが真に「知る」ということなのだ。」(45頁)

わたしは以前からこのことばは知っていましたが、今回、「弟子」を読んで、孔子が子路に語ったことばだと改めて知りました。今回、この通信のために、教育をテーマとしたことばを探してみました。すると、すばらしいことばがいろいろと見つかりました。まず、こんなことばはどうでしょうか。

「教養人は責任を自分に求めるが、知識人は責任を他者に求める。」(364頁)

先日、朝のテレビドラマ『ちりとてちん』で、人に責任を押しつけるのは子どもだというナレーションがありました。なるほどと思います。

「論語」には「君子」と「小人」という基本的な用語があります。新訳では「君子」を「教養人」と訳し、「小人」を「知識人」と訳しています。「知識」を「教養」にまで高めるには、「学ぶ」として「習う」ことが必要です。

これについて有名なのは、巻頭のことばです。

「まなびひてときに之を習う。亦またよ悦よろこばしからずや。」

(17頁)

「たとい不遇なときであっても」学ぶことを続け、「いつでもそれが活用できるように」常に復習する。そのようにして自分の身につけているのは、なんと愉快ではないか。」(17頁)

新訳では、「時に」を「つねに」と読みます。わたしが習ったのは、「時に」でした。それは「時どき」という意味でした。「つねに」によってカッコ内の解釈が生まれるわけです。こちらのほうが、学問の本質を言い当てています。

孔子の学問は人との人との関係を重視します。人のことばと行動との関係について孔子は語ります。

「以前は、他者を見ると、そのことばがりっぱだと思えば、その人の行動を信じたものであった。しかし、今は、その人のことばを聴いても「そのままには受け取らず」、その行動を観ることにしている。」(106頁)

●孔子の学問と人生の理想

それでは、孔子自身はどのような学び方をしたの

でしょうか。

「理解したことを」黙って心に刻んで記憶し、学んで厭いときるといことがなく、人に教えて倦うむこともない。それらは「他人と異なり」この私において問題はない。「これ以外、私に何があるだろうか。」(143頁)

つまり、教えることがそのまま孔子の「学び」なのです。そして、学んだことは、十分に身につくまで生かされます。

「知識や情報を「たくさん」得ても思考しなければ「まとまらず」、どうして生かせばいいのかわからない。逆に、思考するばかりで知識や情報がなければ「一方的になり」、独善的になってしまう。」(45頁)

人間の生死は人生の究極のテーマです。孔子は、弟子から「死」について聞かれたときに次のように答えました。翻訳者の解釈では、孔子は単に個人的な生死の問題を取り上げたのではなく、先祖を祭るといふ宗教的な行事、それが政治にもなっているわけですが、その中で生きることの意味を考えた

いうのです。

「未だ生を知らずんば、焉いづんぞ死をしらんや」

「もしまだ在世の親(生)の意味・意義についてちゃんと理解できないでいるならば、どうして御たま霊(死)の意味・意義についてきちんと理解することができようか。」(249頁)

そして、孔子の理想とする次の生き方は、現代社会の経済至上主義の原理の批判にも通じます。

「教養人は心のあり方を追及するのであって、食べてゆくことを追及するのではない。耕作しても(凶作となれば)食べてゆくことができなこともある。学問をして、食べてゆくことができることもある。教養人は、心のあり方の不安定を憂うが、食べてゆくことの不安定を憂えたりはしないのだ。」(369頁)

孔子のことばは道徳のことばです。だれかが他人に要求するものではなく、自らの行動を律するための行動の指針です。いわば自分が自分を教育するためのことばなのです。思想としての文学なのです。『論語』の価値はそこにあります。